

# 「おじいちゃん、ありがとうございます」

( 出典 茨城県教育委員会 )

「いってきますー!」

元気よく、家をとび出した愛ちゃん。すると、げんかんはきをしていたとなりのおばさんにバッタリ!

「愛ちゃん、おはよう! これから学校。いってらっしゃい。気をつけてね。」

笑顔で声をかけてくれました。なのに、愛ちゃんは、

「・・・」

下を向いたまま、急ぎ足で学校に向かい、歩き始めました。

(せっかく、声をかけてくれたのに、悪いことしちゃったな、でも急いでいたし、タイミングが・・・) そんなことを考えながら歩いていると、横断歩道までやってきました。

小林さんが、今日も黄色い旗はたを持って、立っています。小林さんは、となりに住んでいるおじいちゃんおじいちゃんで、毎朝、この横断歩道に立って、だれにたのまれたわけでもなく、

雨の日も風の日も、みんなのために交通指導をしてくれているのです。

「おはようございます。気をつけていってらっしゃい!」  
といつも元気いっぱい、笑顔で声をかけてくれます。

なのに、愛ちゃんは

「・・・」

今日も声が出ません。左右をかくにんして、だまって横断歩道をわたりました。

(おじいちゃん、ごめんなさい。なんかはずかしくて・・・)

そんな、ある日の帰り道のことです。

愛ちゃんの前を、重たそうな荷物を持ったひとりのおじいさんが、よたよた歩いているのが見えました。

と、その時、おじいさんは、荷物をおろし、道にすわりこんでしまいました。

だいじょうぶかな?とと思って近づいてみると、となりの小林さんでした。

(どうしよう、知らんぷりしちゃおうかな。)

愛ちゃんは、思い切って小林さんに声をかけました。

「こんにちは! だいじょうぶですか?」

「おう、となりの愛ちゃんか。こんにちは。今、帰りかい。わたしなら大丈夫。こしが痛くなっちゃったから、ちょっと休んでいただけだよ。」

「その荷物、わたしが持ってあげるよ。」

そう言うと、愛ちゃんは小林さんの荷物を持って、歩き始めました。

そして、小林さんに合わせてゆっくりゆっくり歩きました。でも、

それ以上、小林さんには何も話しかけられませんでした



しばらくすると、小林さんが愛ちゃんに声をかけました。

「だいじょうぶ？重くないかい？愛ちゃんのおかげで元気が出たよ。」

そう言って、荷物を持つのを代わろうとしましたが、

愛ちゃんはにこっと笑うだけでした。

「じゃあ、荷物、ここにおきます。」

「ありがとうございます。とっても助かったよ。」

小林さんは、やさしく愛ちゃんにほほえみかけました。愛ちゃんは、小さくうなずくと、はずかしそうに走って家に帰りました。

「ただいま！」

「お帰り。今日はおそかったね。」

「うん。ちょっとね。」

「帰ってきたばかりで悪いんだけど、おつかいに行ってきたくれる？」

「いいよ！」

愛ちゃんは、大好きな歌を口ずさみながらおつかいに出かけました。



その日の晩ご飯の時です。

お母さんが、愛ちゃんにおいしそうなみかんを二つわたしました。

「愛ちゃんがおつかいに行っている時、となりの小林さんが持ってきてくれたんだよ。」

愛ちゃん、今日、荷物を持ってあげたでしょう。そのお礼だって。小林さん、なんか

とってもうれしそうだったよ。愛ちゃんによろしくだって。」

お母さんの話を聞いた愛ちゃんは、小林さんにもらったみかんを見つめ、

うれしそうに食べ始めました。あまくて、ほっぺたが落ちそうでした。

翌朝、愛ちゃんは、いつもより早く登校しました。

※ もとの文章を一部変えています。

